

氏 名	李 落落
学位の種類	博士（経営学）
学位記番号	第 5448 号
学位授与年月日	平成 22 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項
学位論文名	中国管理会計史序説 —文化史的アプローチ—
論文審査委員	主 査 教 授 岡野 浩 副 査 教 授 向山 敦夫 副 査 准教授 ト 志強

論文内容の要旨

本論文では、20 世紀初めから 1980 年代までいくつか管理会計の変化を取り上げ、文化史的なアプローチから中国における管理会計の史的展開を分析した。

まず、第 1 章では、管理会計史研究の方法論を概観した。近年注目されてきたように、伝統的な管理会計史研究法に対して、進化論的・発展的な歴史観を見直すとともに、歴史における時間と空間の多層性の認識を前提とした「新たな会計史」を批判的に検討した。本論文では、構造の客観性と実践の主観性の間にあるギャップを乗り越えるためには、「新たな会計史」のひとつの発展形態ともいえる「文化史的アプローチ」が有用であることを指摘した。

第 2 章では、20 世紀初頭における管理会計の近代的権力の獲得プロセスに焦点を当て、脱経済的な文脈を志向し、知の変化と会計変化の間にある関連性を指摘した。①素読の繰り返しによってテキストを身体化させる儒学の学習法、と視覚的効果と批判的黙読によって可視性を追求する西洋式学習法との間にある差異、②全体的視点を持つ人材を選抜する科举と専門家を選抜する西洋式試験制度との間の差異を指摘し、管理会計における新しい「知」の生成プロセスを検討した。また、国家戦略と資本市場という舞台で行われる様々な実践を通じて、管理会計が社会・文化に埋め込まれ、また逆に、新たな組織的・社会的・文化的コンテクストを管理会計が構築するプロセスを考察した。

第 3 章では、20 世紀初頭における科学的管理の浸透プロセスと社会変化についての考察を行った。標準と効率という概念と、「互助的社会組織」との間にある交渉プロセスに対する検討を通じて、管理会計と社会・文化との相互構築関係を明らかにした。

第 4 章では、まず、1950 年代に注目し、中国的管理会計といわれる全員参加型管理会計の形成と「従業員共同体」といわれる「単位制度」の形成との関係性を指摘した。また、1980 年代に焦点をあて、宝鋼の事例を通じて、標準原価を導入と「単位制度」の崩壊の間にある関連性を考察した。

以上、文化的アプローチから、中国におけるいくつかの会計変化を検討することによって、経済的な文脈以外の側面に焦点をあて、知の変化と会計変化の間にある関連性を指摘した。また、会計実践と組織的・社会的・文化的コンテクストとの相互構築関係を明らかにした。

論文審査の結果の要旨

本論文は、欧米におけるトップジャーナル *Accounting, Organizations and Society* の会計変化・会計史の研究者や R.シャルチエなどのアナル学派の歴史研究者によって用いられた「文化史的アプローチ」により、中国の管理会計史の断層面のいくつかを検討したものである。

第 1 章では、伝統的な歴史研究方法論について批判的に考察し、歴史における時間と空間の多層性を前提とする「新たな会計史」の動向を検討するとともに、構造の客観性と実践の主観性の間にあるギャップを乗り越えるものとして「文化史的アプローチ」が有用であることを指摘した。これまでの中国管理会計史では、資本主義と社会主義との経済体制の違いや、両体制における社会的状況と会計との関係についての研究（社会史アプローチ）が散見されていたのに対して、本論文は、文化的実践と文化的生産の領域であり、経験の文化外的次元（社会的次元など）を引き合いに出すことで演繹的に説明できない「文化的諸関係」を考慮した管理会計史を目指そうとするものである。

第 2 章では、儒学の学習法と科举試験に焦点を当て、20 世紀初頭における会計の近代的権力の側面を検討し、さらには、国家戦略と資本市場というアリーナ（土俵）で繰り広げられる会計実践の検討を通して、管理会計が社会・文化に埋め込まれながら、逆に新たな組織的・文化的コンテクストを

形成する有り様を記述した。

第3章では、20世紀初頭における「科学的管理」の中国における浸透プロセスと社会変化との関係性について、栄家の史料を用いて検討した。標準・効率などの諸概念と中国的な特徴である「互助」的社会組織との間にある交渉プロセスを検討することにより、管理会計による社会・文化の構築関係を明らかにした。

最後に、第4章では、1950年代における全員参加型管理会計の形成と「従業員共同体」といわれる「単位」制度の形成と管理会計との関係性について考察した。また、1980年代における宝钢における標準原価の導入と「単位」制度の崩壊との関係性の検討を行った。

本研究は、個人別の標準原価によって、責任の明確化と集団的な単位制度との齟齬によって後者の崩壊につながった点については論証が必ずしも十分ではない点など問題点もあるが、人々の行動・文化の文脈における「標準化」などの概念を分析することによって、知の変化と会計変化の間に存在する関連性を指摘し、中国における管理会計実践と組織的・社会的・文化的コンテキストとの「相互構築関係」を明らかにしようとした先駆的な研究と高く評価することができる。すなわち、「標準化」を、行為（たとえば読書行為）における表象・文化的な側面におけるそれを考慮することが重要であるとし、経済体としての企業のみならず共同生活体としての「単位」における「標準」を考える場合、アメリカにおける会社内に限定された、個人別の科学的管理における「標準」とは意味するところが異なる理解が必要となると主張するのである。

よって審査委員一同は、本論文が博士（経営学）の学位の授与に値すると判断するものである。